

京都府舞鶴市

田辺城跡第 31 次発掘調査報告書

—本丸 石垣の調査—

2019.3

舞鶴市

序

本書は平成30年8月から9月の期間で実施した田辺城跡第31次発掘調査の報告書です。

歌人としても名高い武将、細川幽斎によって築かれた田辺城は、京極氏・牧野氏の治世である江戸時代には田辺藩の中心的な役割を果たしました。そのお膝元である舞鶴西地区は田辺城の城下町として発展し、寺社や町並、芸屋台や祭礼行事など舞鶴を特徴付ける多くの歴史文化遺産が今に伝わっています。

田辺藩の中心的役割を果たした田辺城跡は、城の中心となる舞鶴公園に天守台や本丸・二ノ丸の石垣を今に残し、市街地に残る水路や区割りも城の名残を留め、地中には石垣や武家屋敷が眠っています。この田辺城跡の調査も今回で31次を数え、今回の調査では、初めて田辺城本丸の南端にあたる石垣と堀跡が確認されました。大型の石材で石垣を築くなど、田辺城内でも丁寧な普請が行われた様子が伺え、田辺城の歴史を明らかにする上で貴重な発見となりました。

本市を特徴付ける田辺城の歴史が、更に明らかになっていくことを期待するとともに、本書が皆様に広く利用され、地域の歴史文化への理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査を実施するにあたり、ご理解とご協力を賜りました地元自治会をはじめとする関係各位、並びに調査に参加いただきました方々のご労苦に対しまして、衷心よりお礼申し上げます。

平成31年3月

舞鶴市教育委員会

教育長 奥水 孝志

例 言

1. 本書は平成30年度に舞鶴市が実施した、田辺城跡第31次発掘調査（下表）の調査報告書である。

遺跡名	所在地	調査原因	調査面積	調査期間	調査担当者
田辺城跡	舞鶴市字南田辺 小字元本丸12 番2ほか	集合住宅建設	約400㎡	2018年8月1 日～9月28日	松崎健太

2. 調査は舞鶴市が主体となり実施した。
3. 調査経費及び整理報告に係る費用は、原因者である株式会社マリモが全額負担した。
4. 調査に使用した座標は、国土地理院平面直角座標系(世界測地系)第IV系である。標高はT.P.(東京湾平均海水面高)を使用した。
5. 本書に使用した土色及び出土遺物の色調記録には、財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色調』を使用した。
6. 本書で使用した方位は座標北である。なお、図15(下)のみ磁北を使用している。
7. 現地調査は松崎健太(舞鶴市文化振興課)が担当し、吉岡博之(同課)、松本達也(同課)の協力を得た。
8. 本書の執筆・編集は松崎が行い、吉岡、松本の協力を得た。
9. 本書に掲載した現地写真、出土遺物写真は松崎が撮影した。空中写真の撮影は株式会社イビソクに委託した。
10. 本書に掲載した資料及び記録類、本調査の出土遺物は舞鶴市が保管している。
11. 現地作業にあたっては、公益社団法人舞鶴市シルバー人材センターの支援を受けたほか、調査補助員として真下春美が参加した。
12. 現地調査・整理報告を実施するにあたり、費用負担を頂いた株式会社マリモから協力を得た。また、地元自治会、京都府教育庁指導部文化財保護課をはじめ、以下の方々からご協力、ご指導を頂いた。記して感謝いたします。(敬称略)

北垣聰一郎(石川県金沢城調査研究所名誉所長)、森島康雄(京都府立丹後郷土資料館)、石崎善久(京都府文化財保護課)、中居和志(同)、新谷勝行(京丹後市教育委員会)、大泉寺

目次

第1章	はじめに	1
第1節	田辺城跡の位置と歴史的環境	1
第2節	田辺城跡のこれまでの調査	2
第2章	調査経過	6
第1節	調査経緯	6
第2節	調査経過	6
第3章	調査結果	8
第1節	調査区の設定	8
第2節	基本層序	8
第3節	検出遺構	8
第4節	出土遺物	14
第4章	まとめ	19
第1節	石垣について	19
第2節	絵図との比較	20

図版目次

図版1	調査地遠景 / 調査地全景
図版2	盛土層検出作業風景 / 南北方向裏込石検出状況 / 裏込石1検出状況
図版3	裏込石・盛土層検出状況 / 石垣1裏込石検出作業風景 / 石垣1裏込石検出状況
図版4	石仏出土状況 / 断割1（南側） / 断割1（北側）
図版5	断割2（南側） / 断割2（北側） / 調査区北壁
図版6	石垣1検出作業風景 / 堀内瓦出土状況 / 胴木検出状況
図版7	石垣1完掘状況 / 調査区西壁・堀内堆積状況
図版8	石垣1西側完掘状況 / 完掘状況
図版9	石垣1完掘状況
図版10	石垣1石材写真
図版11	出土遺物写真（瓦類）
図版12	出土遺物写真（陶器・土器・木製品・石製品）

挿図目次

図 1	田辺城位置図	1
図 2	田辺城跡と調査地点	4
図 3	調査区位置図	6
図 4	調査区平面図	7
図 5	石垣 1 立面図・平面図	9
図 6	調査区西壁土層図	10
図 7	断割 1 土層断面図	10
図 8	断割 2 土層断面図	11
図 9	調査区北壁土層断面図	11
図 10	立会調査位置	13
図 11	出土遺物実測図①（軒平瓦、軒丸瓦、熨斗瓦）	15
図 12	出土遺物実測図②（平瓦）	16
図 13	出土遺物実測図③（丸瓦）	17
図 14	出土遺物実測図④（陶器・土器・木製品・石製品）	18
図 15	石垣の分析	19
図 16	旧御本丸跡開墾絵図面（明治 14 年）	21
図 17	本調査区の推定石垣位置	21
図 18	田辺城西側石垣修葺伺図控（部分）（元禄 5 年）	22
図 19	田辺城図（牧野家文書）部分（延宝・元禄年間）	22
図 20	田辺籠城図（江戸時代）	22

付表目次

表 1	田辺城関連年表	2
表 2	田辺城跡調査歴	5
表 3	遺物観察表	23

写真 1	立会調査写真（左：北側敷地境界、右：南側敷地境界）	13
------	---------------------------	----

第1章 はじめに

1. 田辺城の位置と歴史的環境

田辺城は京都府舞鶴市に所在した近世城郭である。舞鶴市は京都府の北東部に位置し、現在の市域は旧丹後国加佐郡の大半を占める。リアス式海岸が発達した若狭湾の西端にあたり、市内中央には湾口から東と西に深く湾入する舞鶴湾が形成され、波静かな港町として発展した港湾都市である。

舞鶴西地区は田辺城の城下町として発展し、近世には政治と物流の拠点として栄えた。その面影が城跡の遺構や城下の古い街並み、田辺城とゆかりのある寺社の数々、城下に伝わる祭りや芸屋台などの民衆文化から窺い知ることができる。

明治34（1901）年に日本海側唯一の海軍鎮守府が開庁すると、舞鶴東地区を中心に軍港として著しい発展を遂げた。旧軍港施設の赤れんが倉庫群など、多くの歴史遺産が現在も残されている。戦後は「岸壁の母」で知られるように引揚港となり、昭和33（1958）年まで13年間にわたり、多くの引揚者を迎え入れた歴史をもつ。

現在は、海上自衛隊関連施設や、造船所が東港を中心に集積しているほか、西港は貿易港として整備が進み、日本海側拠点港として発展を見せている。

田辺城は京都舞鶴港の中でも西港に面した舞鶴西地区の沖積平野に位置している。城域は南北約950m、東西約500mの範囲に及び、北側には海、東側には伊佐津川、西側には高野川、南側には低湿地が広がる要害地に立地している。城は本丸を中心に二ノ丸、三ノ丸が配され、これらを堀で囲う輪郭式平城である。

天正6（1578）年、細川藤孝、明智光秀らは織田信長から丹後国平定の命を受け、翌年、建部山城（舞鶴市）から中山城（同）に逃れた丹後守護一色義道を自刃させた。

天正7（1579）年、丹後国が平定されると細川藤孝は信長から丹後国主に命ぜられ、同8年に丹後国に入国した。入国した細川藤孝・忠興父子は、丹後統治の拠点として宮津城の築城に着手し、続いて藤孝の居城として田辺城の築城に着手した。天正10（1582）年、藤孝は本能寺の変で信長が自害すると剃髪して幽斎玄旨と号し、丹後国を忠興に譲るとともに、程なく田辺城を隠居城としたとされている。田辺城は天正19（1591）年頃には完成したとみられているが、明確な史料はない。

慶長5（1600）年、忠興が徳川家康の会津討伐に加勢するため出陣し留守中、丹後国は大坂方軍勢（西軍）に攻められた。これに対し幽斎（藤孝）は宮津城等を焼き払い、わずかな手勢を田辺城に集めて防戦した。各地で展開された関ヶ原合戦の前哨戦の一つに数えられる「田辺籠城」と呼ばれるこの戦いは52日間に及び、後陽成天皇の勅使の派遣によって開城され、終結に至った。細川氏は

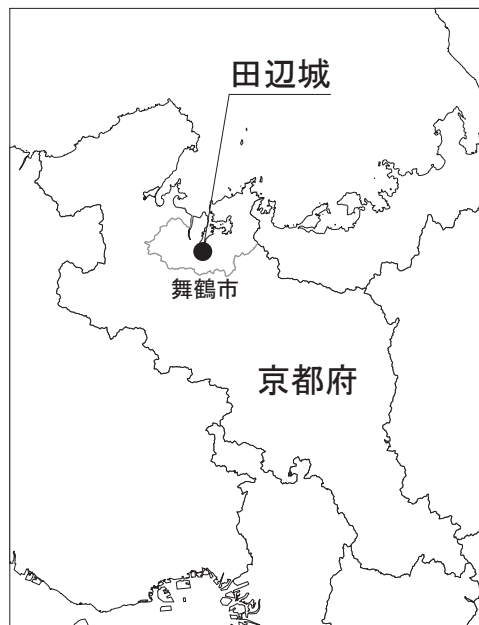


図1. 田辺城位置図

関ヶ原合戦で東軍の勝利に貢献し、軍功により拝領した豊前国に移転した。

代わって丹後国は信濃飯田の京極高知が拝領し、慶長6（1601）年に入国した。宮津城が先の籠城戦に際して焼き払われており、高知は田辺城へ入城したとされている。高知は手狭だった田辺城の拡張を行い、城の東側、南側に三ノ丸を設けて家臣団を居住させた。

元和8（1622）年、高知の死にともない、遺言により丹後国は3人の子に分与され、嫡子高広が宮津藩（78,175石）、庶子高三が田辺藩（35,000石）、養子高道が峯山藩（10,000石）として受け継いだ。高三は田辺藩初代藩主となり、3代にわたって統治した。

寛文8（1668）年、田辺藩主の京極高盛が但馬国豊岡へ国替えとなった。代わって京都所司代を15年務めた牧野親成が藩主となり、以降廃藩まで牧野氏が藩主を務めた。明治2（1869）年に田辺藩から舞鶴藩へ改称し、同4年に廃藩置県を迎えた。

明治6（1873）年の廃城後、田辺城は取り壊しとなり、現在では大部分が市街地化されたが、舞鶴公園内の石垣や庭園等、一部が現存するほか、現在の市街地の中に地割として城跡の痕跡を比較的良好に留めている。

2. 田辺城跡のこれまでの調査

田辺城跡では、本調査を含めこれまでに31次を数える発掘調査が実施されており（図2）、本丸天守台跡や堀跡、武家屋敷跡、土塁跡や道路跡等をはじめ、部分的にその様相が明らかとなっている。調査一覧については表2のとおりである。

これまでの調査では、本丸天守台や本丸内井戸跡の調査において、細川期の石垣、遺構を確認しているが、田辺城築城当初の縄張りや、建物跡等の遺構の確認には至っておらず、細川期の具体的な田辺城の様相については不明である。

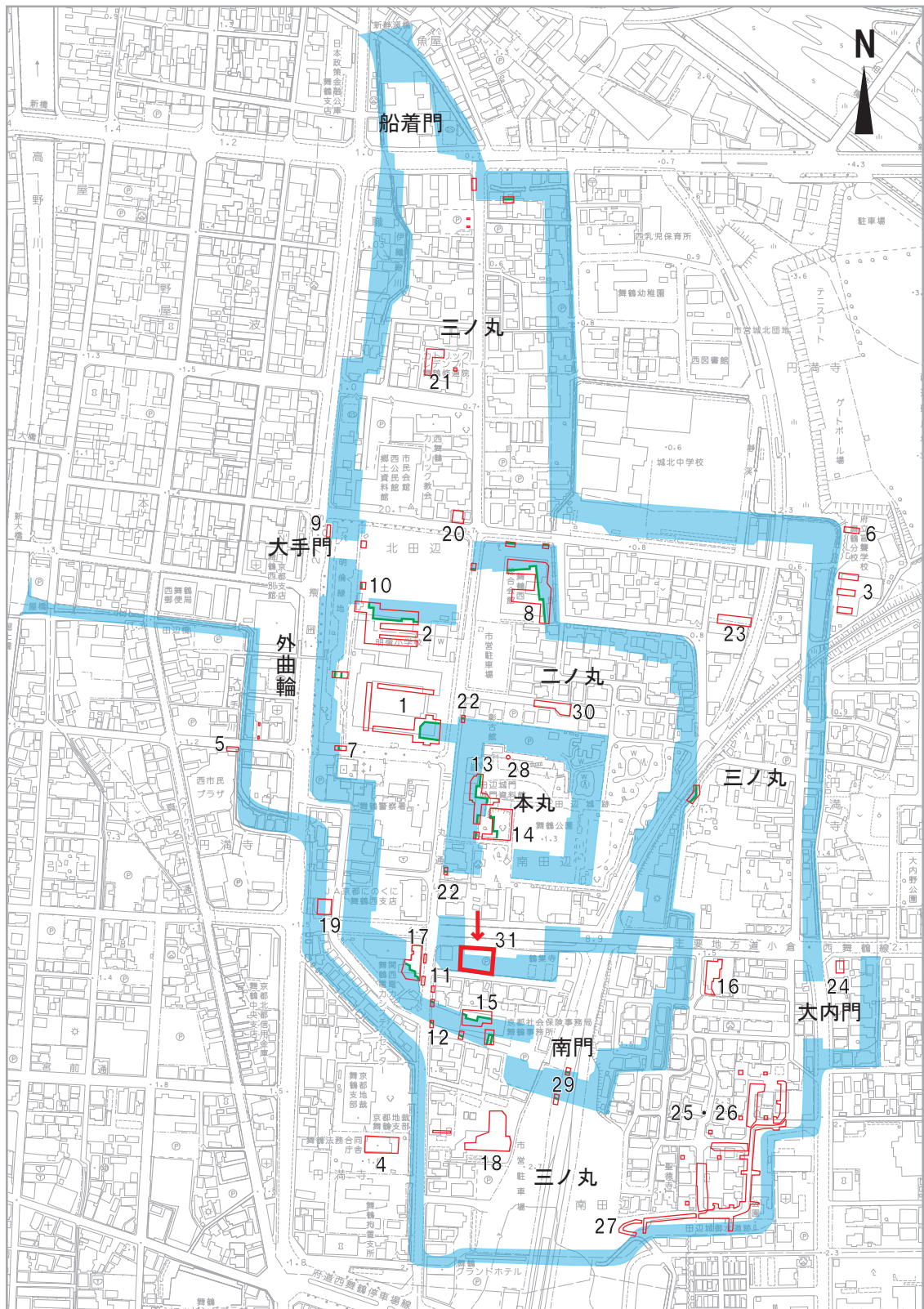
他方、過去の調査では、京極氏によって拡張整備された三ノ丸の武家屋敷跡をはじめ、二ノ丸武家屋敷跡や御殿跡、堀跡等の京極期・牧野期を通じた城内の様相が部分的に明らかになっている。

表 1. 田辺城関連年表

年号	西暦	おもなできごと
天正 4年	1576	織田信長、安土城を築城する。
6~7年		信長丹後攻略を命じ、細川藤孝・明智光秀両軍で丹後守護一色氏を攻め、中山城の合戦で一色義道討死する。丹後国平定。
8年	1580	8月、細川藤孝が信長から丹後国主に命じられ入国、宮津八幡山城にはいり、光秀の協力を得て宮津城の築城を開始する。
9年	1581	宮津城完成（12月ごろ）。丹後国天正検実施（110,700石）。このころ田辺城の築城にとりかかる。
10年	1582	6月、本能寺の変で信長自害。藤孝剃髪して幽斎玄旨と号し、丹後国を忠興に譲る。
11年	1583	8月、河辺宮において能会が催される。
13~14年		豊臣秀吉、関白太政大臣になる。
16年	1588	11月、田辺新殿において能会が催される。
19年	1591	このころまでに田辺城完成か。
20年	1592	朝鮮出兵（文禄の役）忠興参戦。

慶長	2年	1597	朝鮮出兵（慶長の役）。
	3年	1598	8月、秀吉病死。
	5年	1600	6月27日、忠興が徳川家康の会津征伐に加勢し出国する。
			7月21日、福知山城主小野木縫殿介ら1万5千の兵が田辺城を包囲、田辺籠城戦おこる。これに先立ち、幽斎は宮津城・峰山城・久美浜城の城を自焼させる。同月29日、幽斎「古今伝授」をおこなう。
			9月12日、勅使が来着、両軍和議成立。田辺城開城。同月15日、関ヶ原の合戦。忠興、東軍で参戦し戦功をあげる。
			11月、忠興軍功により豊前国を拝領。丹後国は京極高知が拝領する。
	6年	1601	3月、信州飯田から京極高知入国。田辺城に入る。
			田辺城改修普請にとりかかる。三ノ丸が拡張される。
	7年	1602	7～9月、高知慶長検地実施（123,175石）
	8年	1603	家康、江戸幕府を開く。
	19年	1614	11月、大阪の役冬の陣に参戦。
	20年	1615	5月、大阪の役夏の陣に参戦。
元和	6年	1620	12月、田辺城火災
	8年	1622	高知病死、遺言により丹後国は3人の子に分与させる。宮津、田辺、峰山の各藩成立。田辺藩（35,000石）は高三が受け継ぐ。
	9年	1623	田辺籠城戦の際に自焼した宮津城の再構築始まる。嫡子の高広が田辺城の諸門・櫓等を宮津城に移設したため田辺城は荒廃する。
寛永	2年	1625	宮津城再構築ほぼ完了。高広、田辺城より同城に入る。（宮津越え）
慶安	3年	1650	洪水、田辺で城および町中に浸水。
明暦	2年	1656	高三の子、高直が田辺城の再建を幕府に願い出、宮津城の高広と争論になる。（幕府は和議を命じ、高直の田辺領有を承認する。）
寛文	8年	1668	5月、高直の子、高盛が但馬国豊岡に国替えとなる。代って京都所司代を15年間勤めた牧野親成（譜代大名）が藩主となる。
	9年	1669	6月、親成入部、このとき田辺城は「矢倉、門、高堀一ヶ所もなし石垣所々崩れ三ノ丸向こうの石垣東ノ方南ノ方三四力所 七八間程宛崩有之」といった状態であったため、幕府に普請願いを提出、許可される。
	10年	1670	2月、田辺城の城門、櫓、石垣、高堀等の再建はじまる。6月、再建工事は概ね終了する。
延宝	9年	1681	本丸、二ノ丸石垣及び土堀崩壊のため修復。
元禄	5年	1692	三ノ丸石垣、土堀修復。
	11年	1698	田辺城堀普請。
	15年	1702	田辺城堀普請始まる。
宝永	2年	1705	田辺城堀普請。
享保	12年	1727	9月、田辺城下町から大火災発生。城の大手門、櫓、三ノ丸侍屋敷類焼する。
	15年	1728	類焼した建物を再建。
天明	年間		城内に藩校舎「明倫斎」開校。安政4年、野田笛浦によって勸善寮（高等学問所）と蔵修寮（学問所奉行と係員詰所）が設けられる。
	6年	1794	城内三ノ丸近所出火。
文化	13年	1816	田辺城水道普請行われる。
天保	10年	1839	城内出火。大手門よりの長屋などを焼失。
文久	年間		「明倫斎」を「明倫館」と改称する。
慶応	3年	1867	5月、イギリス船が田辺に入港する。10月、徳川慶喜が朝廷に大政奉還する。
明治	元年	1868	鳥羽・伏見の戦（戊辰戦争）、江戸開城、東京に改称。
	2年	1869	6月、版籍奉還、田辺藩を舞鶴藩と改称。牧野弼代（10代）舞鶴藩知事になる。
	4年	1871	7月、廃藩置県、舞鶴藩は舞鶴県に、次いで豊岡県に合併。明治9年に京都府に編入される。
	6年	1873	田辺城の廃城が決定。
	7年	1874	田辺城の取り壊し始まる。官有地として払い下げ、城内の開発が始まる。
平成	4年	1988	田辺城資料館開館。

※この略年表は田辺城に関する事項を『舞鶴市史 年表編』を参考にして作成した。



□ 調査地点 (数字は調査回数)

— 石垣検出地点

■ 堀推定位置

0 1/5,000 500m

図2. 田辺城跡と調査地点

表 2. 田辺城跡調査歴

調査 回数	調査地点							調査 面積	調査 年月	調査概要	調査機関	報告書
	本丸	本丸堀	二ノ丸	二ノ丸堀	三ノ丸	三ノ丸堀	隣接地 その他					
1次	○	○	○					約630㎡	1981.6 ～9	本丸堀石垣、二ノ丸堀石垣、二ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	舞鶴市第11集
2次			○	○			隅櫓	約700㎡	1982.6 ～7	二ノ丸堀石垣、隅櫓石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第11集
3次							○	約200㎡	1983.7	三ノ丸堀隣接地を調査 水田を検出	府埋文 センター	府概報第10冊
4次							○	約400㎡	1983.8 ～9	三ノ丸堀隣接地を調査	府埋文 センター	府概報第10冊
5次							○	約10㎡	1983.7	三ノ丸堀隣接地を調査	舞鶴市	—
6次							○	約30㎡	1984.1	三ノ丸堀隣接地を調査 水田を検出	府埋文 センター	府概報第13冊
7次			○					約10㎡	1984.1	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	—
8次			○	○				約500㎡	1984.11 ～12	二ノ丸堀石垣、二ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	—
9次							○	約30㎡	1986.1	二ノ丸堀隣接地を調査	府埋文 センター	府概報第23冊
10次			○					約50㎡	1987.2	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	—
11次			○	○				約35㎡	1989.1 ～2	二ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	舞鶴市第16集
12次			○					約15㎡	1989.1	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第16集
13次	○	○						約300㎡	1990	本丸堀、石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市史通史 編(上)
14次	○	○					天守台	約200㎡	1991	天守台石垣(天正期)を検出	舞鶴市	舞鶴市史通史 編(上)
15次			○	○			枅形部	約600㎡	1992.8 ～10	二ノ丸堀石垣、枅形部石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第22集
16次					○			約300㎡	1993.10 ～1994.1	三ノ丸屋敷地(京極期、牧野期)を 検出	舞鶴市	舞鶴市第27集
17次			○	○				約300㎡	1994.5 ～7	二ノ丸堀、石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第28集
18次					○			約600㎡	1994.9 ～12	三ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	—
19次							通路	約150㎡	1997.2 ～3	土塁を検出	舞鶴市	—
20次					○			約60㎡	1997.5 ～6	三ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	—
21次					○			約160㎡	2000.2 ～4	三ノ丸屋敷地(京極期、牧野期)を 検出 池跡を確認	舞鶴市	舞鶴市第35集
22次	○							約25㎡	2000.10 ～11	本丸堀石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第35集
23次					○			約125㎡	2002.8 ～10	三ノ丸屋敷地を検出	舞鶴市	舞鶴市第39集
24次					○		大内門 付近	約60㎡	2003	整地層を確認	舞鶴市	—
25次					○	○	御水道	約545㎡	2004.10 ～2005.1	三ノ丸堀、土塁、道路跡、屋敷地を 検出 上水道施設「御水道」の石組 溝を検出	舞鶴市	舞鶴市第42集
26次					○			約600㎡	2005.9 ～12	三ノ丸屋敷地、道路跡を検出	府埋文 センター	府概報第119冊
27次					○	○	御水道	約150㎡	2008.4 ～5	三ノ丸南端外堀の土塁、上水道施設 「御水道」の石組溝を検出	舞鶴市	舞鶴市第45集
28次	○						本丸内 井戸	約25㎡	2010.9 ～10	本丸内井戸跡を検出	舞鶴市	舞鶴市第48集
29次				○				約25㎡	2012.5 ～6	二ノ丸堀石垣を検出	舞鶴市	舞鶴市第49集
30次			○				御殿 (牧野 期)	約290㎡	2012.9 ～12	築城当初を含む4時期の遺構面を検 出 京極期、牧野期の屋敷地を検 出	舞鶴市	舞鶴市第49集
31次	○	○						約400㎡	2018.8 ～9	本丸南郭南端の石垣・堀を検出 一部石垣は築城当初の可能性	舞鶴市	舞鶴市第51集

第2章 調査経過

1. 調査経緯

平成29年に、周知の埋蔵文化財包蔵地である田辺城跡の範囲内において、株式会社マリモから開発に伴う取扱いの問い合わせを受け、文化財の保護について協議を行った。開発予定地は本丸の一角にあたり、石垣等が地中に残存していると予想された。開発計画はマンションを新築するもので、埋蔵文化財への影響が避けられないと判断されたため、協議の上、マンション基礎範囲を中心に調査区を設定し、平成30年度に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査に係る費用は全額調査原因者である株式会社マリモが負担した。

2. 調査経過

現地調査は平成30年8月1日から9月28日の期間で実施した。調査地は廃城後に田畑として長らく利用された後、事業用地等を経て、現状は駐車場となっており、重機によって現代整地層を除去した。調査区北西部については、現代整地層直下から若干の遺物を包含する盛土層を確認したため、その上面で重機掘削を止めた。調査区南側は、東西方向に現代遺物を含む堀の埋め土及び石積み、石垣裏込石の一部を確認したため、堀内部についてさらに重機で掘削し、現代遺物が混ざった埋土を除

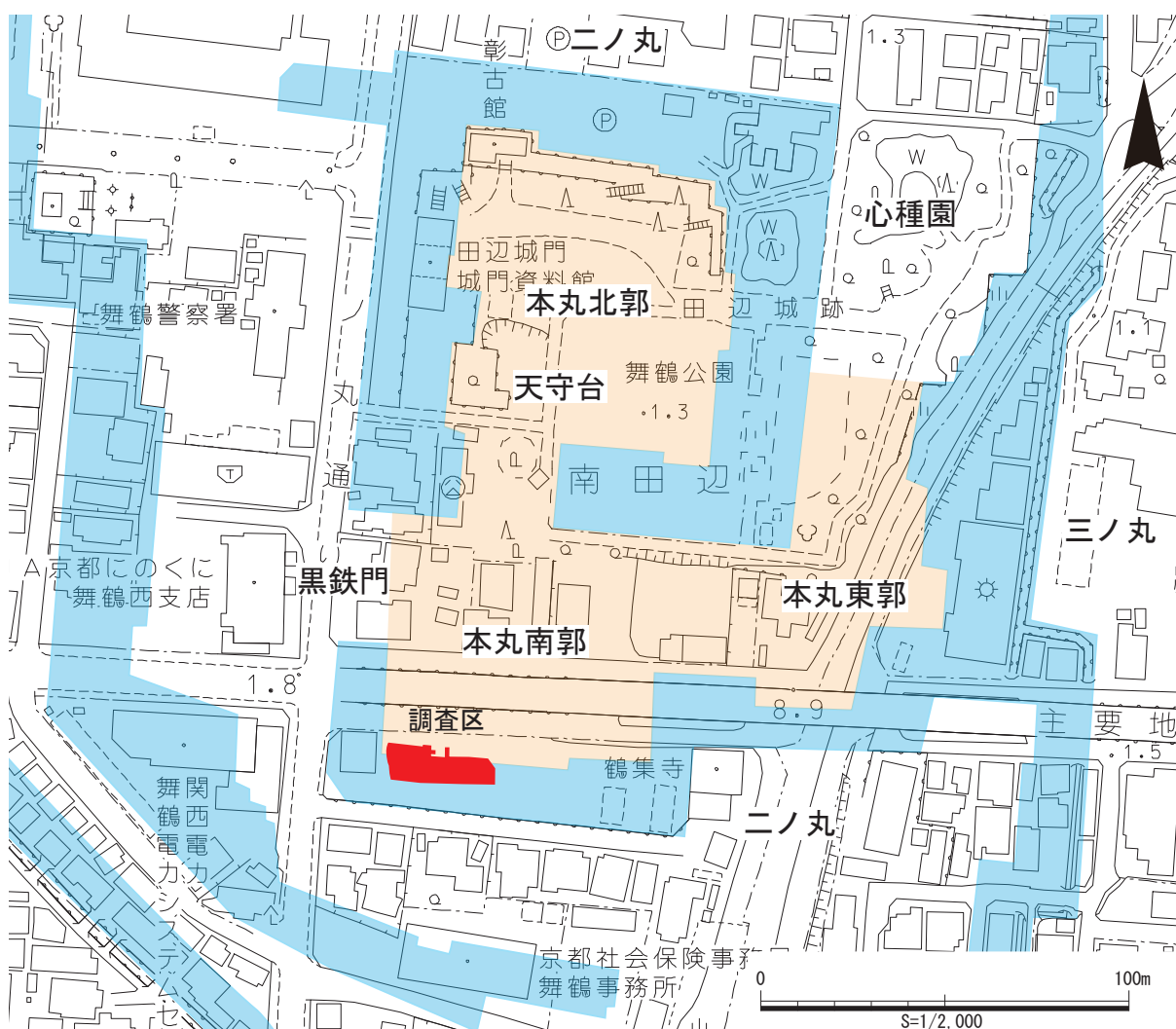


図3. 調査区位置図

Y: -60795

Y: -60800

Y: -60805

Y: -60810

Y: -60815

Y: -60820

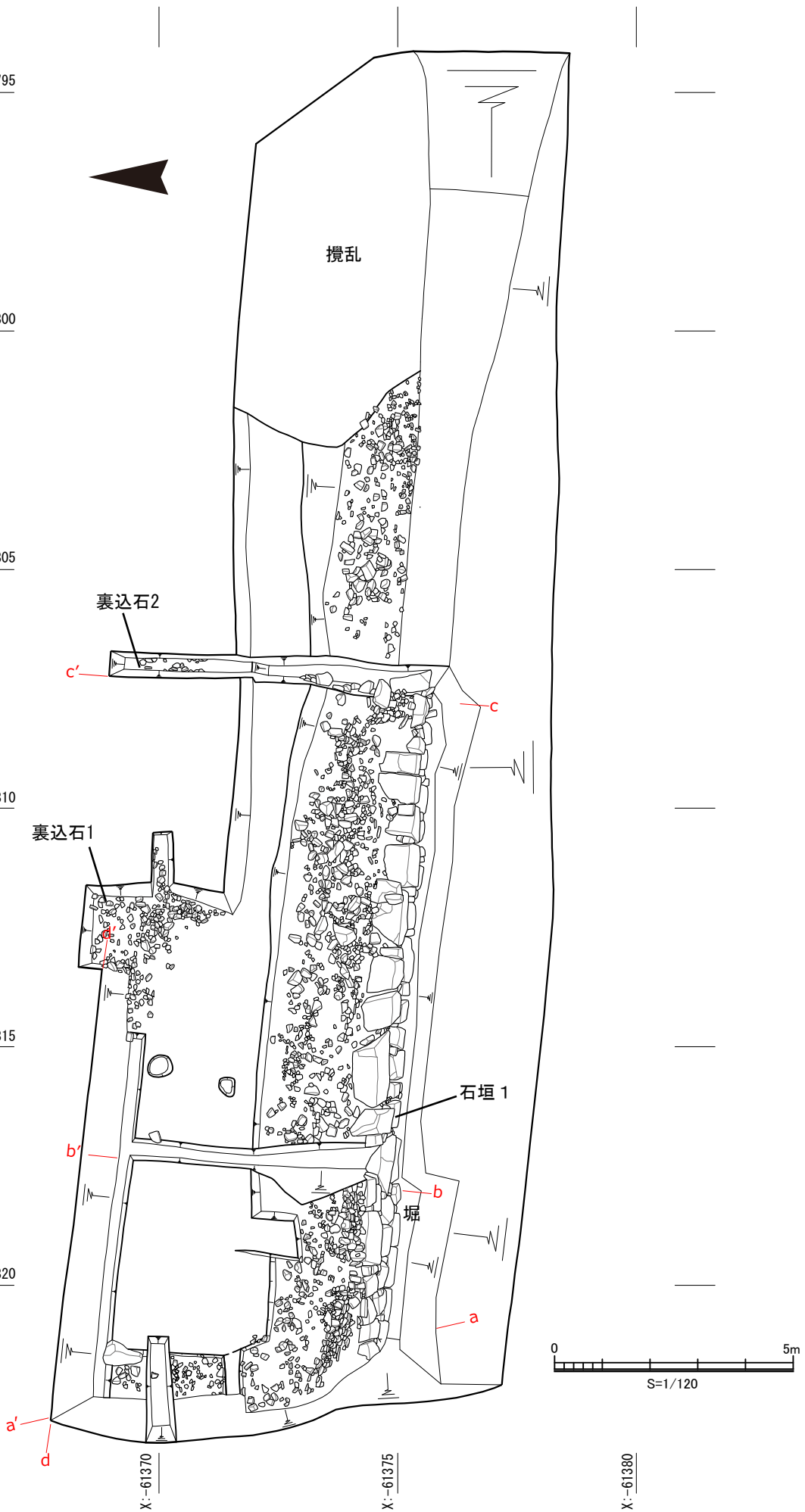


図4. 調査区平面図

去した。8月7日からは人力掘削によって石垣及び裏込石の検出を進めたところ、さらに下層に石垣が続くことが判明し、追加で重機による掘削を行った。しかし、掘削深度が海拔-1m以上と深くなったことに加え、湧水が非常に激しく作業が困難となり、最下段まで石垣全面を露出させることは危険と判断したため、一部の確認に留めた。

9月11日に報道発表を行い、9月15日に現地説明会を実施したところ、約90名の参加者があった。その後、必要な記録作業を行った。9月19日にラジコンヘリによる空撮を実施し、9月28日をもって機材等を撤収し現地調査を終了した。

現地調査終了後、出土遺物の整理作業等を進め、本書を編集を行った。

第3章 調査結果

1. 調査区の設定

調査地は絵図や字界図等から本丸南郭⁽¹⁾の外郭部南辺にあたり、堀と石垣が範囲に含まれると推定された。調査地南半は大部分が堀内にあたるため一部で確認調査を実施し、調査地北半については石垣の推定位置を中心に調査区を設定した(図3)。

2. 基本層序

本調査地の基本層序は、現代整地層、盛土層、粘土層(基盤層)である。堀に面する石垣と城内側の石垣によって構成される外郭盛土⁽²⁾の高まりが存在したと考えられるが、後世の削平を受けて上部の遺構面は現存しなかった。盛土の検出高は、基盤となる粘土層から約1.5mを図る。石垣の構築と合わせ、段階的に整地されたとみられる。調査区の南半については、現代整地層を除去すると、現代ゴミを多量に含む堀跡を埋め立てた土層を確認した。堀埋土の層序については後述する。

3. 検出遺構

検出した遺構は、石垣1と堀、城内側石垣の裏込石とみられる裏込石1・2、堀に面した石垣1と城内側石垣で構成される外郭部盛土である。以下順に記述する。

石垣1(図4・5)

現代遺物を含む堀の埋立層を除去する過程で、北側の盛土層と堀との境界付近に栗石を多数検出した。この栗石を石垣の裏込石と判断し精査したところ、茶褐色土が混入した栗石層と、攪乱を受けた灰色粘質土混じりの栗石層の2層を認識した。併せて、小石材を利用した石積みが東西方向に確認されたが、この石積みは攪乱を受けた栗石層内に築かれていた。攪乱を受けた栗石層は現代遺物の混入が認められたことから、廃城後に石垣石材を抜き取った際に二次堆積したとみられ、そこに築かれた石積みは廃城後に田畑として利用された際の石積みであると判断した。また、現代遺物の混入が無く、攪乱を受けていない茶褐色土が混入した栗石層は、本来の堀石垣に伴う裏込石層と判断した。裏込石

注

(1) 田辺城本丸の部分名称として、天守台を有する主郭の北郭と、南側に接続する南郭、南郭から東側に接続する東郭と便宜上呼称する。

(2) 堀に面した石垣と城内側石垣によって構成された郭の外郭部分の土手を便宜上、外郭部盛土と呼称する。

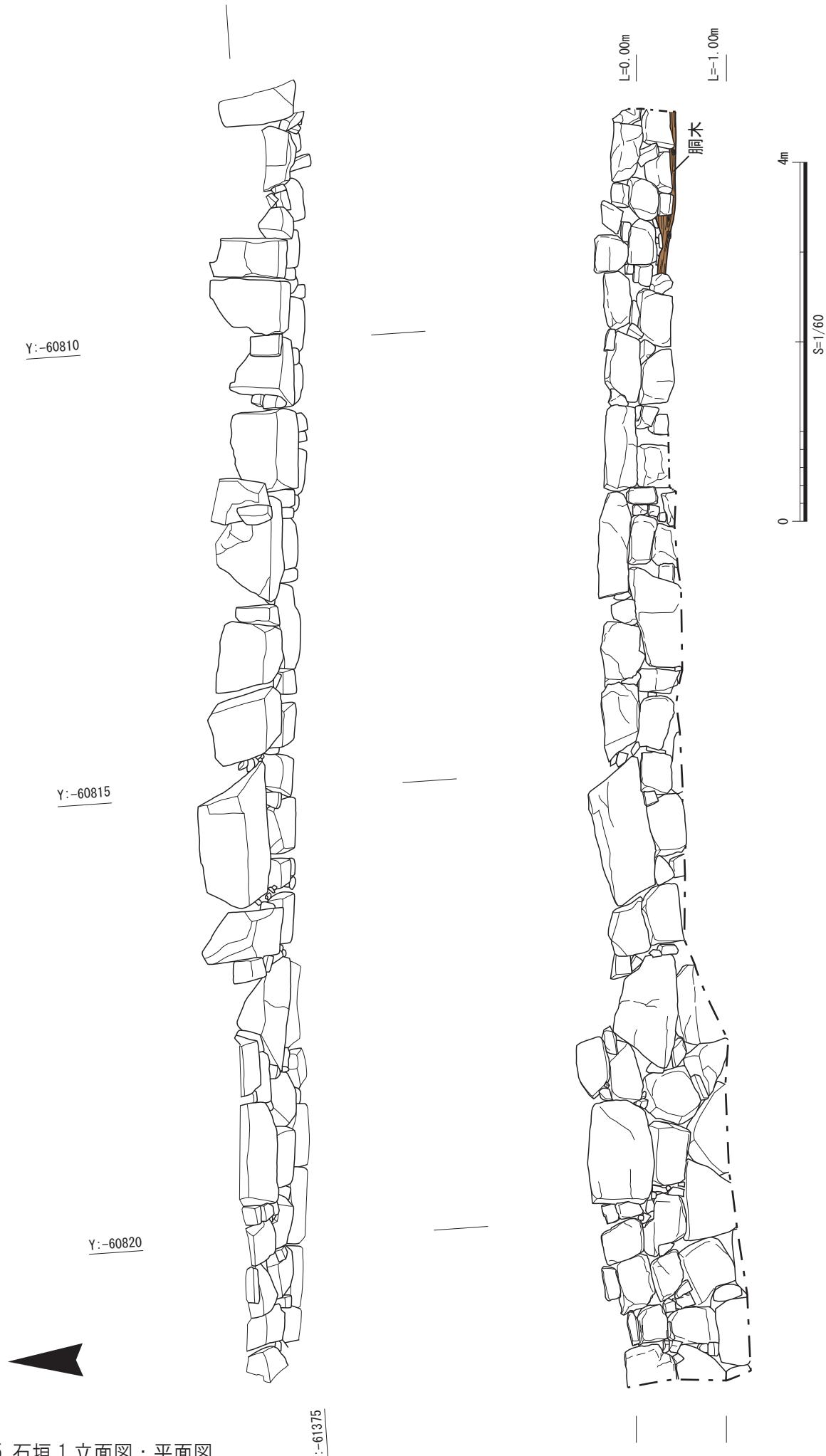


图 5. 石垣 1 立面图 · 平面图

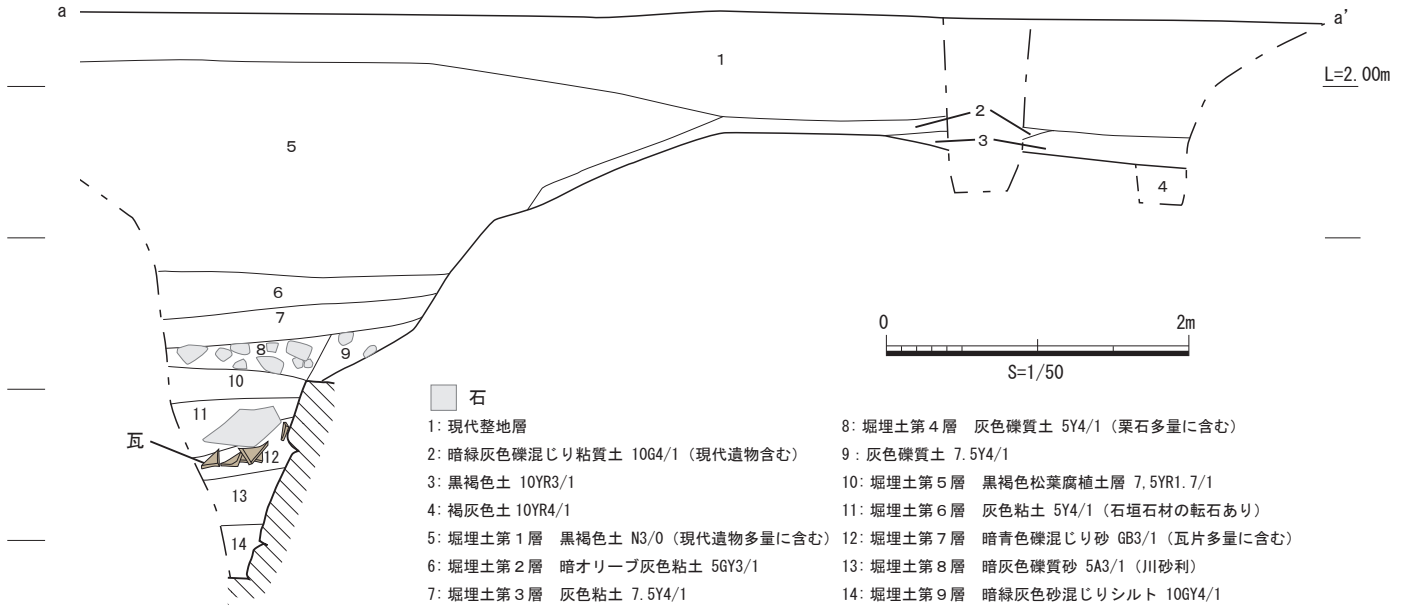


図 6. 調査区西壁土層図

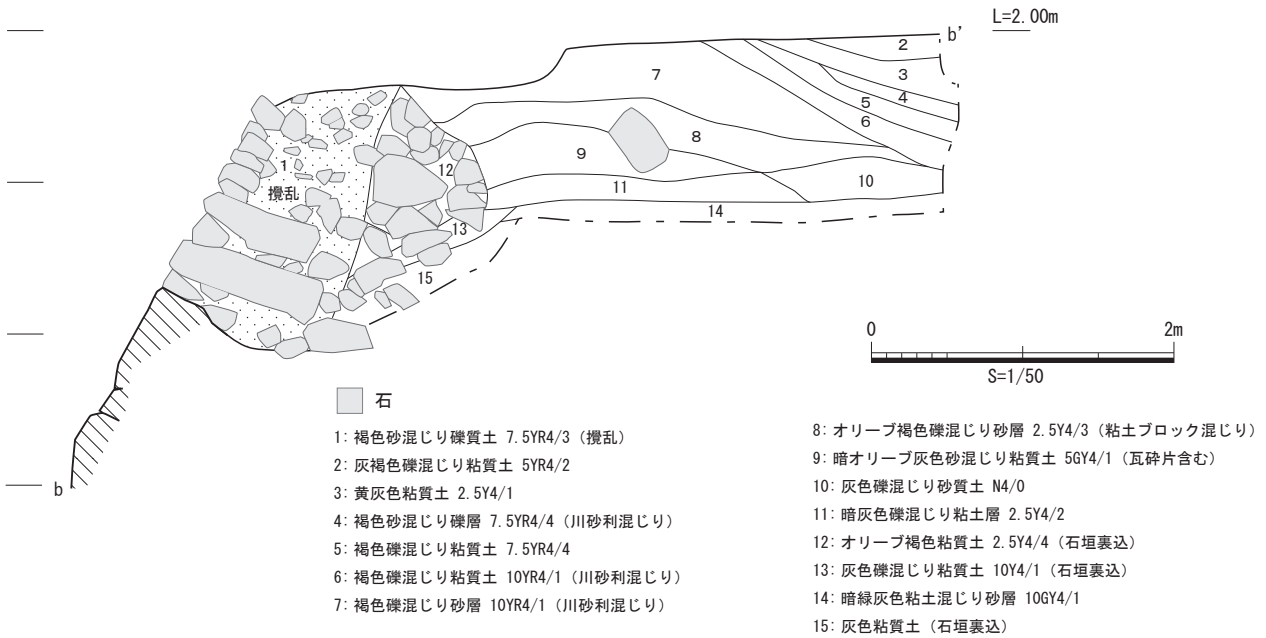


図 7. 断割 1 土層断面図

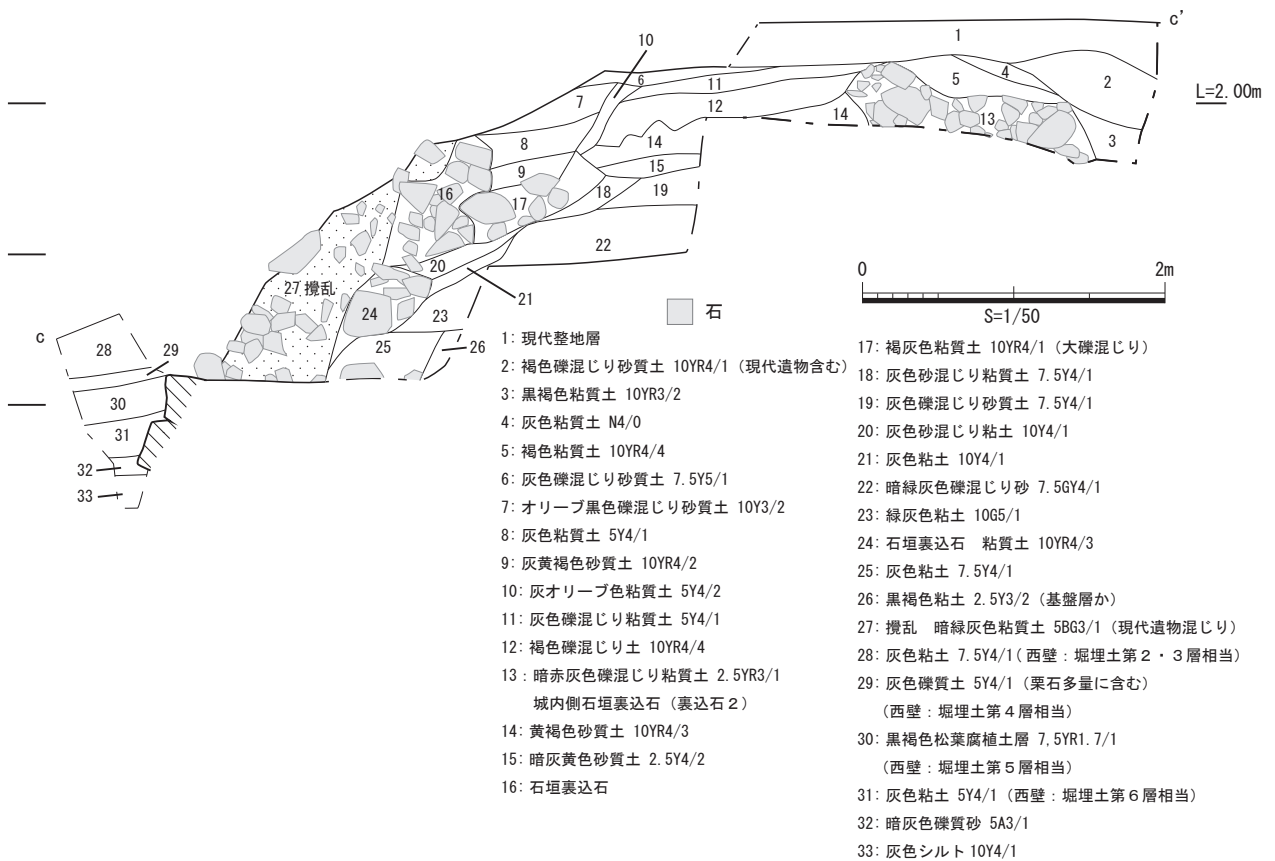


図 8. 断割 2 土層断面図

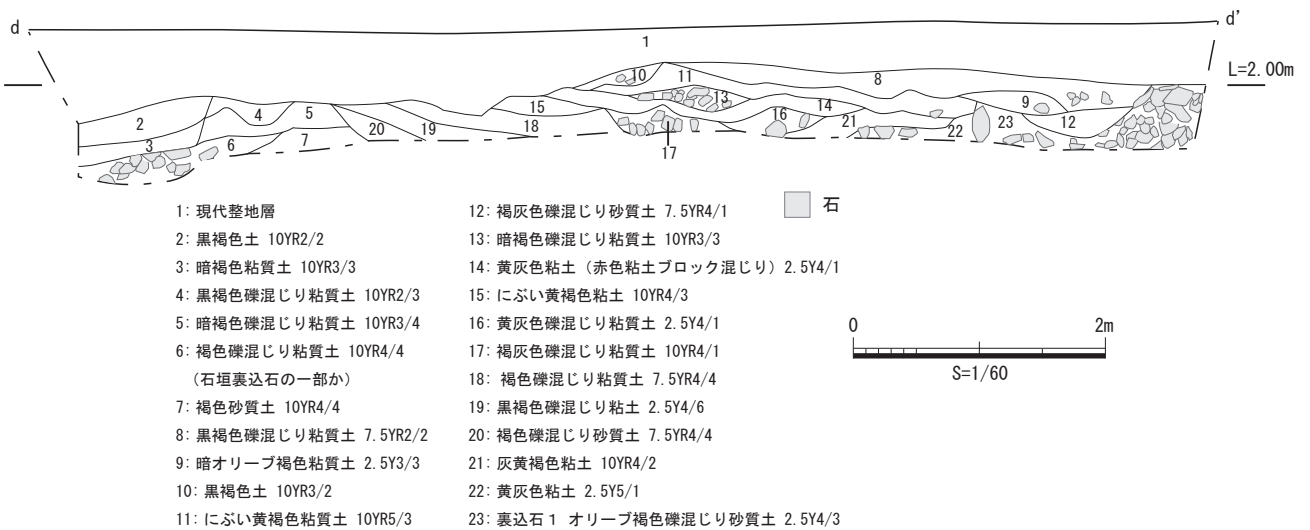


図 9. 調査区北壁土層断面図

層は、検出した石垣上端から約2m～2.5m内側の範囲で検出された。

後世の石積み及び攪乱を受けた二次堆積の栗石層を除去すると、下層から石垣1を検出した。石垣は東西方向に約14.5mを測り、検出した範囲内には石垣の屈曲部は見られず、直線を呈する。石垣はさらに調査区外へ続いているが、前述した裏込石層が調査区西端で北へ折れており、調査区西端に近接して石垣の隅部があると考えられる。

安全上の理由から最下段まで全面を掘削することができなかつたため、西側を一部深掘りして確認することに留めた（以降、西側・東側と呼称）。石垣は西側で最大5段（約1.9m）を検出し、東側は2段（約0.9m）を検出した。検出上面の標高は、西側が標高0.15m～0.67m、東側は標高0.3m～0.55mである。石垣上部は石材が抜き取られており、本来の高さは不明である。石垣西側は基底層が深く、標高-1.1m付近で根石上端を確認した。一方、石垣東側の基底層は標高-0.5m付近であり、東西の基底層に高さの差異がある。

東側の基底石下には、一部に胴木が確認できた。胴木は荒割りした板材で、基盤となるシルト層に据えられていた。なお、西側の深掘り部分については根石の下を確認できなかったため、胴木の有無は不明である。

堀（図4・6）

石垣に面して本丸南郭南辺の堀を検出した。堀の堆積状況は図6のとおりである。堀埋土第1層が現代の埋立層で、堀埋土第2・3層は後世に堀内を水田として利用されていた時の耕作土である。堀埋土第4層は栗石が多量に堆積していた。石垣を検出した高さとも合致することから、廃城後に石材が抜き取られた際に、石垣裏込石が堀内に落ち込んで堆積したものと考えられる。堀埋土第5層は松葉が大量に堆積した腐植土層である。堀埋土第6層の粘土層には石垣石材の転落とみられる石材が数石確認できた。堀埋土第7層の礫混じり砂層中には、瓦片が多量に堆積していた。堀埋土第8層は砂利層、最下層の堀埋土第9層はシルト層である。

田辺城跡の他の調査地点でも、堀内から同様の松葉層が見つかっており、堀埋土第5層以下が廃城以前の堆積層と判断した。

裏込石1・2（図4・8・9）

石垣1背後の盛土中に、栗石の集積を2箇所を確認した（裏込石1・2）。これは、石垣1と対をなし、郭の外郭部を構成する城内側石垣の裏込石とみられ、裏込石1と2は一連のものと考えられる。城内側石垣本体は調査区内では確認することはできなかった。裏込石1は、栗石の集積が逆L字状に屈曲しており、城内側石垣もこれに対応して屈曲していたと考えられる。検出高は裏込石1で標高約2.0m～1.8m、裏込石2で標高約2.25mを測る。

外郭部盛土（図4・7～9）

石垣1と城内側石垣の対によって、郭の外郭を構成する盛土を検出した。調査区西側は外郭部の南西隅にあたり、櫓台の存在が想定される。東側は櫓台に接して土塀が連なる外郭が続いていたと考えられる。特に調査区西側は、石垣1の構築に併せて背後に盛土をし、さらに土手から城内側に向かって整地をした様子が土層断面で確認できた（図7）。整地は粘土と砂・砂利を交互に敷くもので、緻密



写真 1. 立会調査写真（左：北側敷地境界、右：南側敷地境界）

である。東側の盛土と比較しても、固く緻密な整地がなされていることから、櫓台等の構造物の土台にあたるのではないかと推測される。盛土内には瓦や土器の碎片が僅かに含まれる。盛土検出上面の標高は約 2.0 m である。本地点の基盤となる粘土層は標高約 0.5 m であり、基盤層からの盛土検出上面の高さは約 1.5 m である。上部は削平を受けており、本来の高さは不明である。

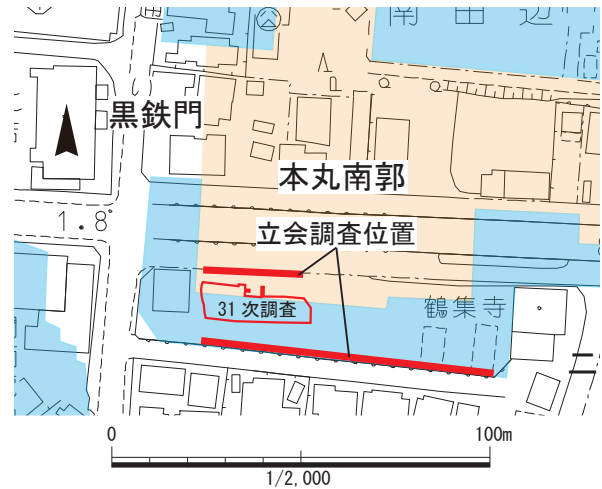


図 10. 立会調査位置

（立会調査結果）

現地調査終了後に開発予定地敷地境界の擁壁工事について、別途立会調査を実施した（写真 1、図 10）。その際の所見についても併せて触れておく。

敷地境界南側では、現代整地層下で堀の埋土が広がっており、検出した石垣 1 の対岸にあたる石垣は確認できなかった。しかし、敷地境界南側の道路下にある下水道敷設の際に石垣が見つかったとされていることから推測すると、この地点の堀幅は約 13 m 程度と考えられる。

敷地境界北側では、現代整地層下に若干の遺物を包含する包含層を確認した (GL - 0.9 m)。しかし、城内側石垣の痕跡や、その他の遺構等は確認することができなかった。境界から北側は道路の造成によって削平されている状況がみられた。

4. 出土遺物

今回の調査では、瓦、陶器類、土器類、石製品、木製品等の遺物が整理コンテナ 15 箱分出土した。中でも堀内から出土した瓦が大多数を占める。以下、主なものについて記述する。なお、20・21を除いて全て堀内からの出土である。

瓦（図 11～13、図版 11）

1～3は軒平瓦である。いずれも中央に宝珠、両脇に唐草を配する。4～6は軒丸瓦である。中央に巴、周囲に連珠を配する。いずれも巴と連珠の間に圏線がみられる。5・6は胴部が残存するが、内面にはコビキ B の技法がみられる。7は熨斗瓦である。内面に斜めの線刻があり、中央の溝に沿って二分割された痕跡が残る。熨斗瓦の幅は約 10 cm、長さは約 22.6cm を測る。8～10 は平瓦である。共にほぼ完形で、長さ 28.9cm～29.2cm、幅 22.7cm～23.4cm を測る。11～13 は丸瓦である。11 の内面にはコビキ A の技法がみられ、工具痕が残る。12 は内面にコビキ B の技法がみられる。13 は内面にコビキ A の技法がみられる。また、縄と布目の痕跡がみられる。出土丸瓦のコビキ A と B の比率は、圧倒的にコビキ B が主体を占めている。

陶器・土器類（図 14、図版 12）

14・15 は播鉢である。14 は 7 本以上の単位で播目が施されている。15 は 1 本単位の播目が施されている。16 は土師皿である。内面見込みをナゲ調整し、不明瞭な圏線をなす。口縁部の複数個所に煤が付着し燈明皿と考えられる。口径は約 12.6 cm である。17 世紀の所産とみられる。

木製品（図 14、図版 12）

17～19 は木製品である。17 は独楽で半分に割れている。中心に軸を挿入した孔がある。独楽の直径は約 4.1 cm、高さは約 4.9 cm である。漆塗や彩色などの痕跡は観察できない。18 は直径約 11.8 cm 程度の小型の曲物の底板と考えられる。側面に木釘が打ち込まれている。19 は用途不明木製品である。

石製品（図 14、図版 12）

20 は一石五輪塔の空輪部分であり、下部は欠損している。四面にそれぞれ梵字が彫られている。石垣 1 裏込内から重機掘削中に出土した。21 は石仏である。下半部が欠損しているが、像容は阿弥陀如来像とみられる。石垣 1 裏込石内（攪乱層）から出土した。

その他

この他、堀の最下層付近から、碎片となった須恵器や土師器、瓦器碗等が出土した。須恵器は古墳時代のものを含んでいる。共に著しく摩耗しており、二次堆積したものと考えられる。

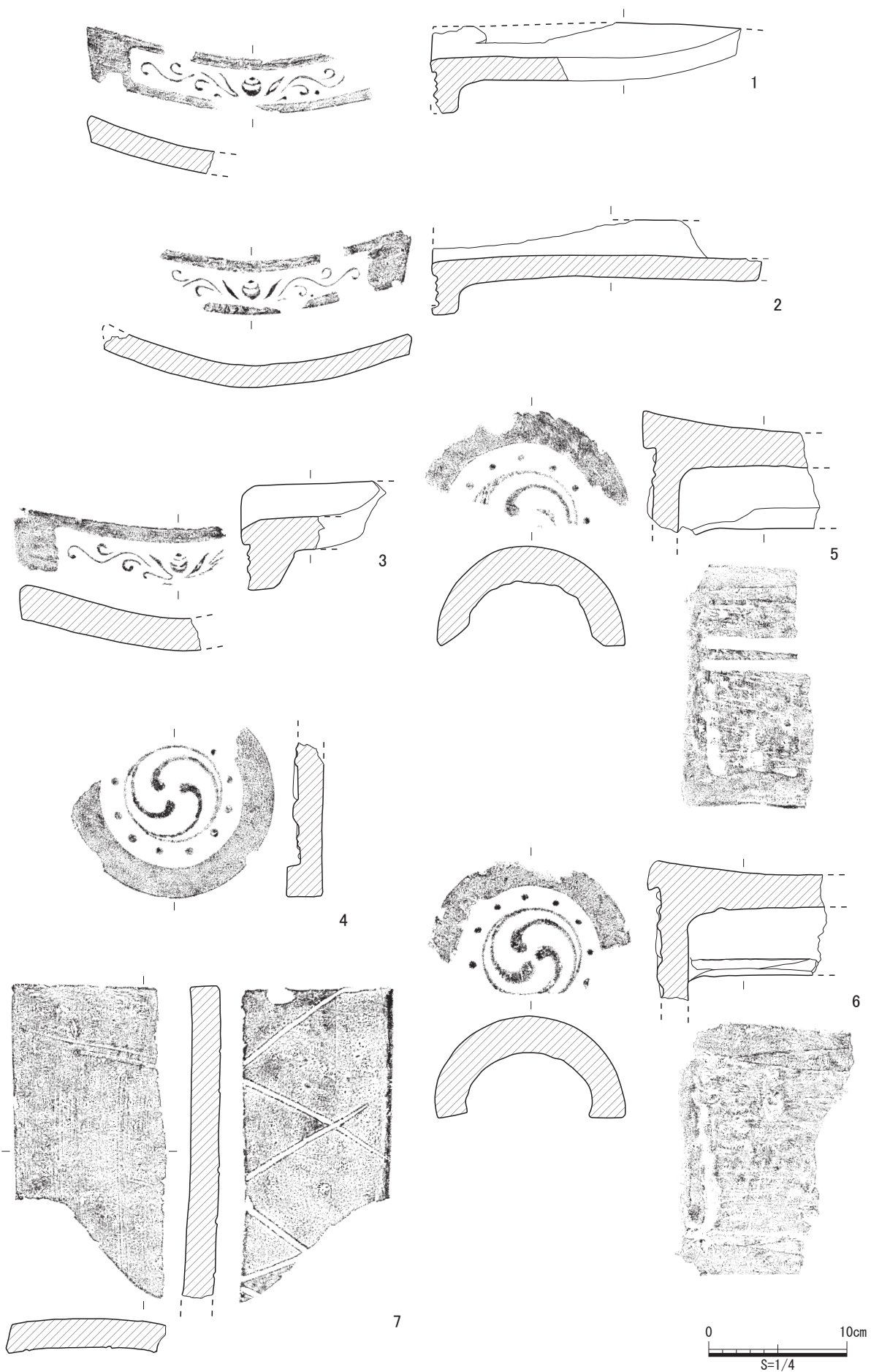


图 11. 出土遺物実測図① (軒平瓦、軒丸瓦、熨斗瓦)

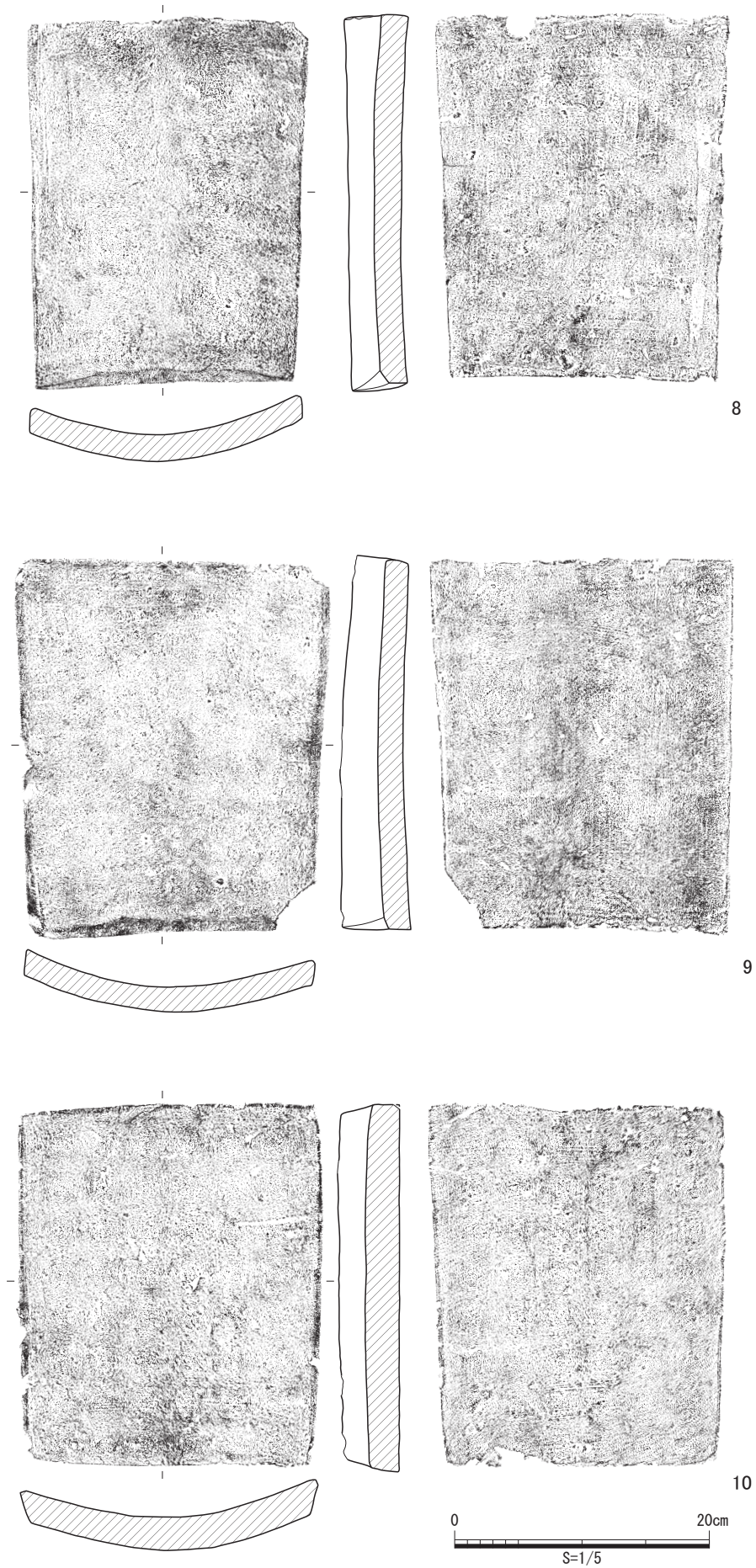
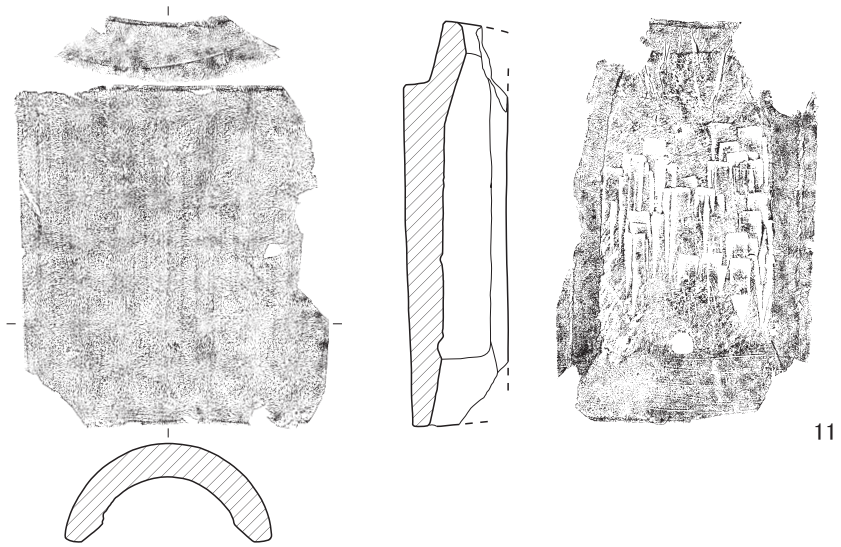
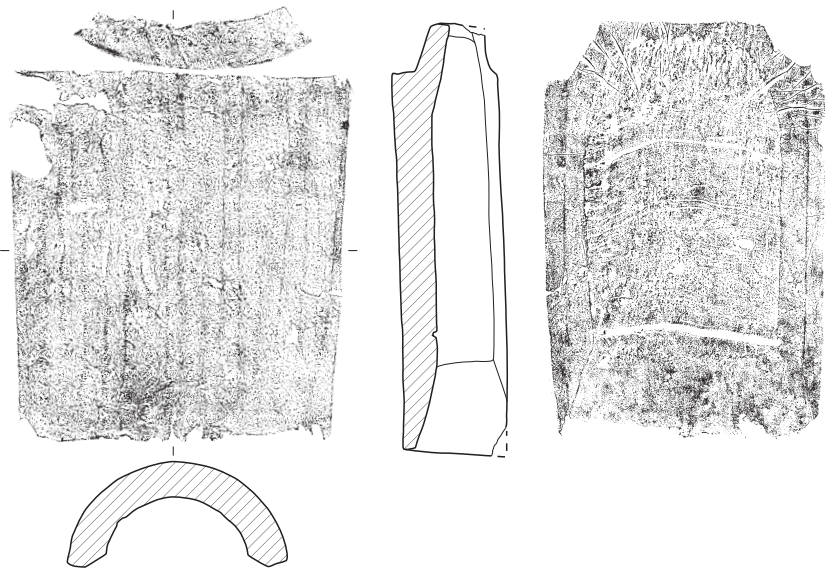


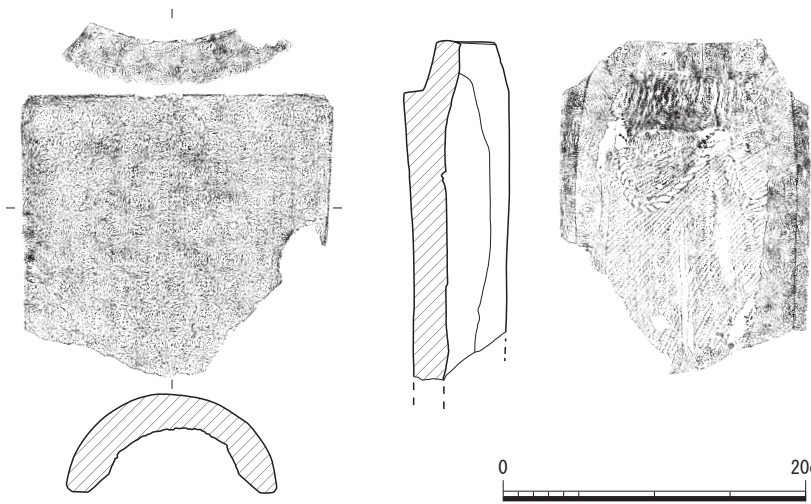
图 12. 出土遺物実測図② (平瓦)



11



12



13

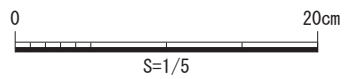


图 13. 出土遺物実測図③ (丸瓦)

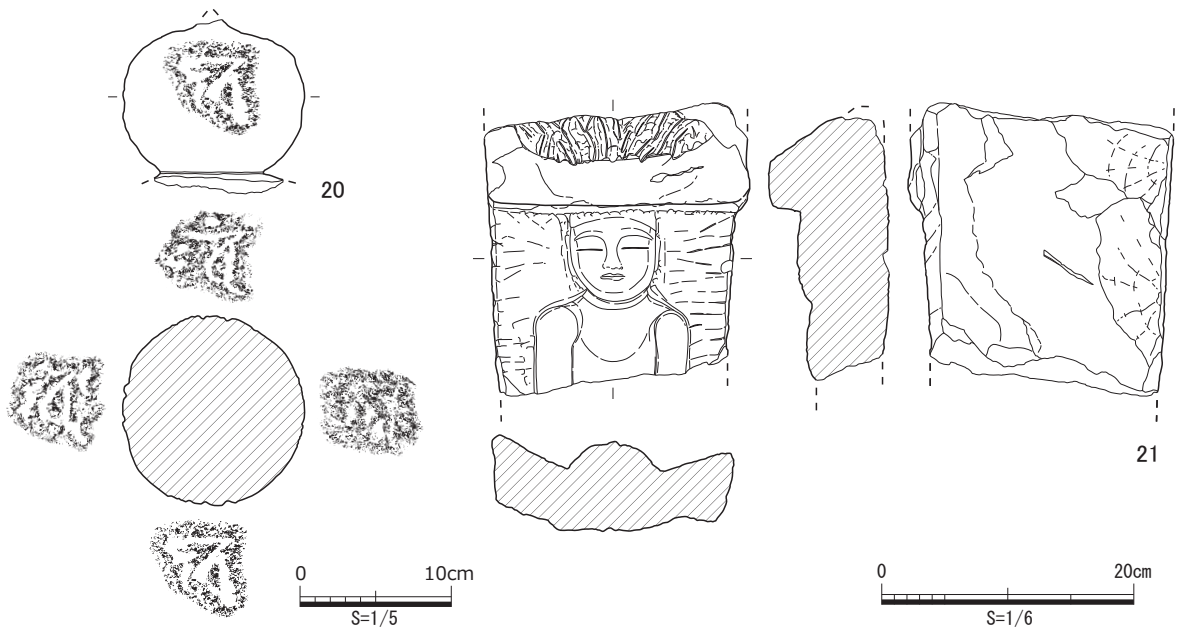
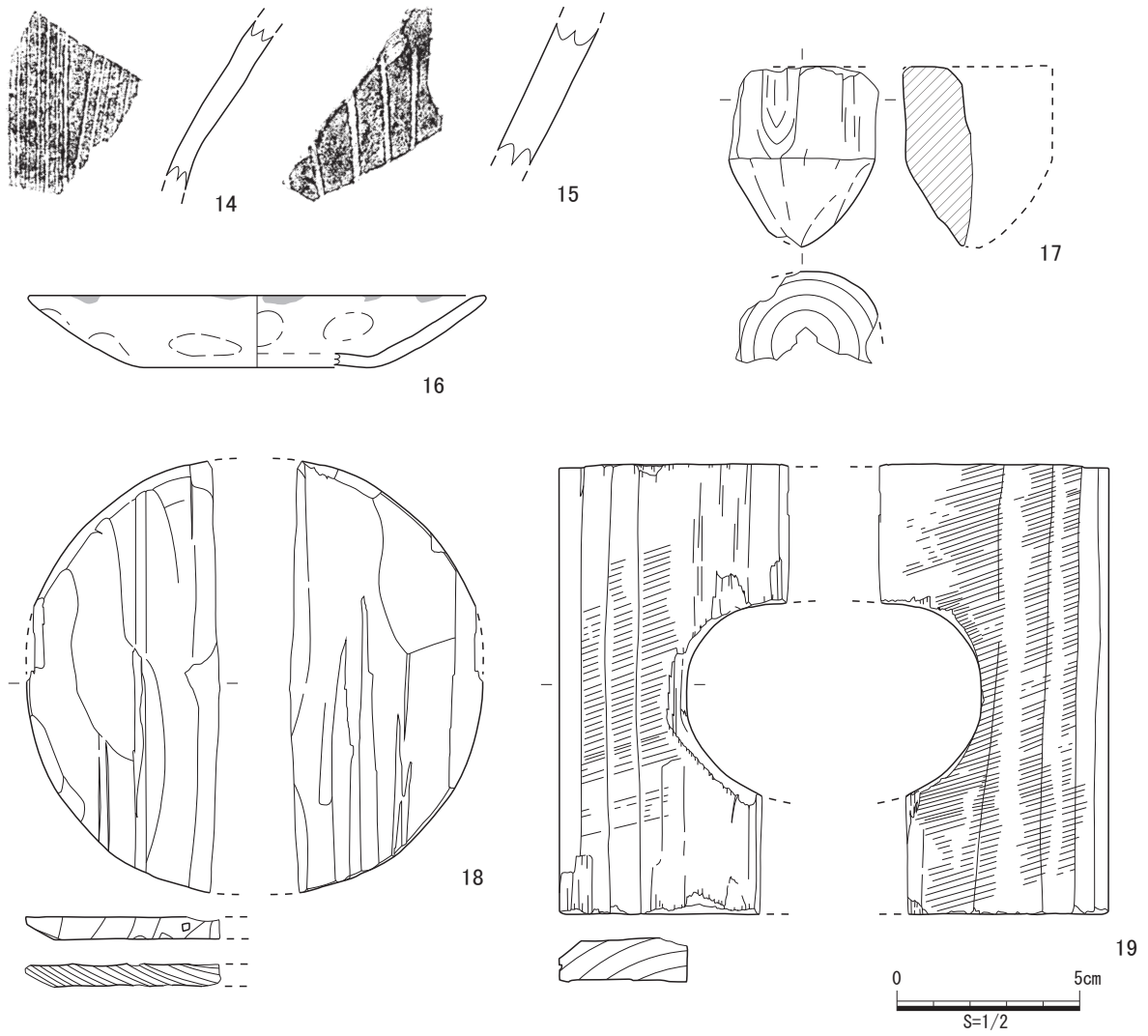


图 14. 出土遺物実測図④ (陶器・土器・木製品・石製品)

第4章 まとめ

石垣について

本調査で検出した石垣1について、クリノメーターで傾斜角度等を計測し、検討を行った(図15上・中)。地点別の傾斜角度は、西側(図左側)で 60° ～ 65° 、東側(図右側)で 64° ～ 72° を測る。個別石材毎に計測した傾斜角度は、西側では 65° 未満を主体として 70° 未満の石材で占められている。東側では 65° 以上の石材が主体を占め、 70° ～ 80° の石材も含んでいる。傾斜角度については、総じて西側の方が緩い傾向にあると指摘できる。一方、個別石材の石垣面の走向を計測すると(図15下)、西側と東側で走向のばらつきは同程度であり、有意な差異を見いだせなかった。

築石に使用されている石材は全て花崗岩である(図版10)。間詰石には一部花崗岩以外にも数石見受けられた。花崗岩は茶褐色を呈するものが多い。花崗岩の産地としては、舞鶴湾口東側の博奕岬付近や、由良海岸等が想定される。西側では角が丸く、加工の少ない石材を用いている傾向があり(図版10-11・12)、東側では比較的角張った石材が散見される(図版10-9・10)。また、東側であっても、下段には角の丸い石材が使用されている箇所も見受けられる。いずれも矢穴は見られないが、一部石材には打ち欠いて調整した痕跡が認められる(図版10-5)。また、東端付近は石材も比較的小ぶりなものが目立つ。

以上のことから、西側・東側の差異を踏まえると、西側がより加工度の低い大振りの自然石を使用す

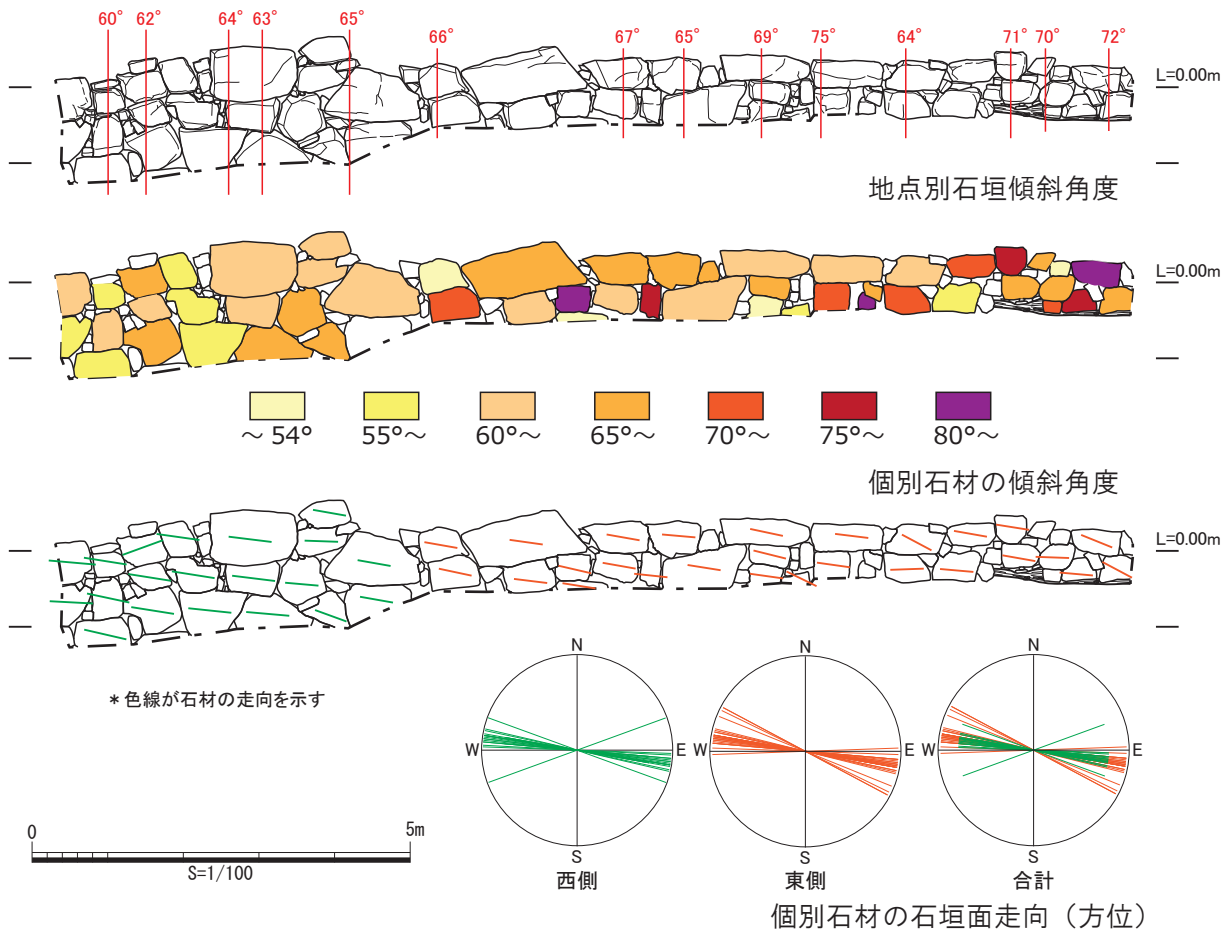


図15. 堀石垣の分析

ること、東側が石材の面を揃える積み方をしている一方で、西側は点で石材を揃えて積んでいることなどの要素から、西側がより古い時期の石垣であると考えられる。また、東側については積み直しが行われたと考えられる。特に西側については、田辺城築城当初まで遡る石垣である可能性が指摘できる⁽³⁾。

石垣1の基底部の標高は、西側で約－1.1 m（根石上端）、東側で約－0.5 m（基底石下端）であり、0.5 m以上の差異が確認できた。石垣1の西側隅部に向かってより深くなっていることがわかる。また、過去に確認された堀の深さは、本丸・二ノ丸で標高 0.0 m前後から 0.5m 前後、三ノ丸南側で標高 1.0 m前後であり、今回の調査地点がとりわけ深いと指摘できる。

石垣基底部が傾斜する類例として、第2次調査で確認された二ノ丸北西隅部の大草櫓石垣が挙げられる。櫓東側の石垣において、北東隅部に向かって基底部が 0.5 m程度深くなっており、本調査地の状況と類似する。このことから、櫓の隅部等、重要箇所には深い基底部を設けたと考えることもできるが、他方、流路や軟弱地盤等、旧地形に起因することも想定できる。

田辺城築城以前の地形は、大小の流路が蛇行しながら流れる低湿地が広がり、旧円満寺村の集落が微高地に想定される等、複雑な微地形を呈していたとみられる。本調査地では堀の最下層付近から、古墳時代の須恵器や中世の瓦器等の築城以前の遺物が碎片となって複数出土している。いずれも水流によって摩耗しており、築城以前は付近に流路等が存在した可能性がある。今回は堀内の調査が小面積であったため、詳細な状況は把握できなかったが、そういった旧地形にあわせて石垣を築造したことや、あえて旧流路を利用し、堀を設けた可能性も考えられる。今後の検討課題としたい。

絵図との比較

本調査地の石垣1と外郭部盛土のラインを復元すると図 17 のように想定できる。廃城後の払下げの状況を示した「旧御本丸跡開墾図面」（明治 14 年）を見ると（図 16）、本丸南郭の外郭部南西角は「石垣」として色分けされ、分筆されている状況が記録されている。外郭部盛土の形状や位置関係は調査結果とよく符合している。

この他、絵図に描かれた本地点の様子を確認すると、元禄 5（1692）年の「田辺城西側石垣修覆伺図控」（図 18）では、本地点に「櫓台」が描かれている。堀に面した南辺に出角・入角を設けた構造となっており、石垣について調査結果と一致しない。一方、延宝・元禄年間（1673～1704）の「田辺城図」（図 19）においても櫓台と思われる高まりが表現されているが、南辺に屈曲部は無く、直線の石垣として描かれている点で調査結果と一致する。この他の絵図でも、出角・入角を設けた表現と、直線で描かれた表現の両者が存在しており、不明な点が残る。明確な遺構の確認には至らなかったが、絵図に「櫓台」として描かれているものもあることから、本調査地点である本丸南郭の外郭南西隅に櫓台を想定しておきたい。

今回検出した石垣 1 については、一部が田辺城築城当初の細川期まで遡る可能性がある。「田辺籠城図」（江戸時代：大泉寺蔵）に描かれた細川期の田辺城の縄張りにおいて、推定される今回の調査地点の位置を図 20 に示した。細川期には大手門が城の南面に存在し、今回の調査地点は大手門西側に隣接している。本石垣が細川期まで遡るとすれば、築城当初の石垣の事例としては、本丸天守台に次いで2例目となる。

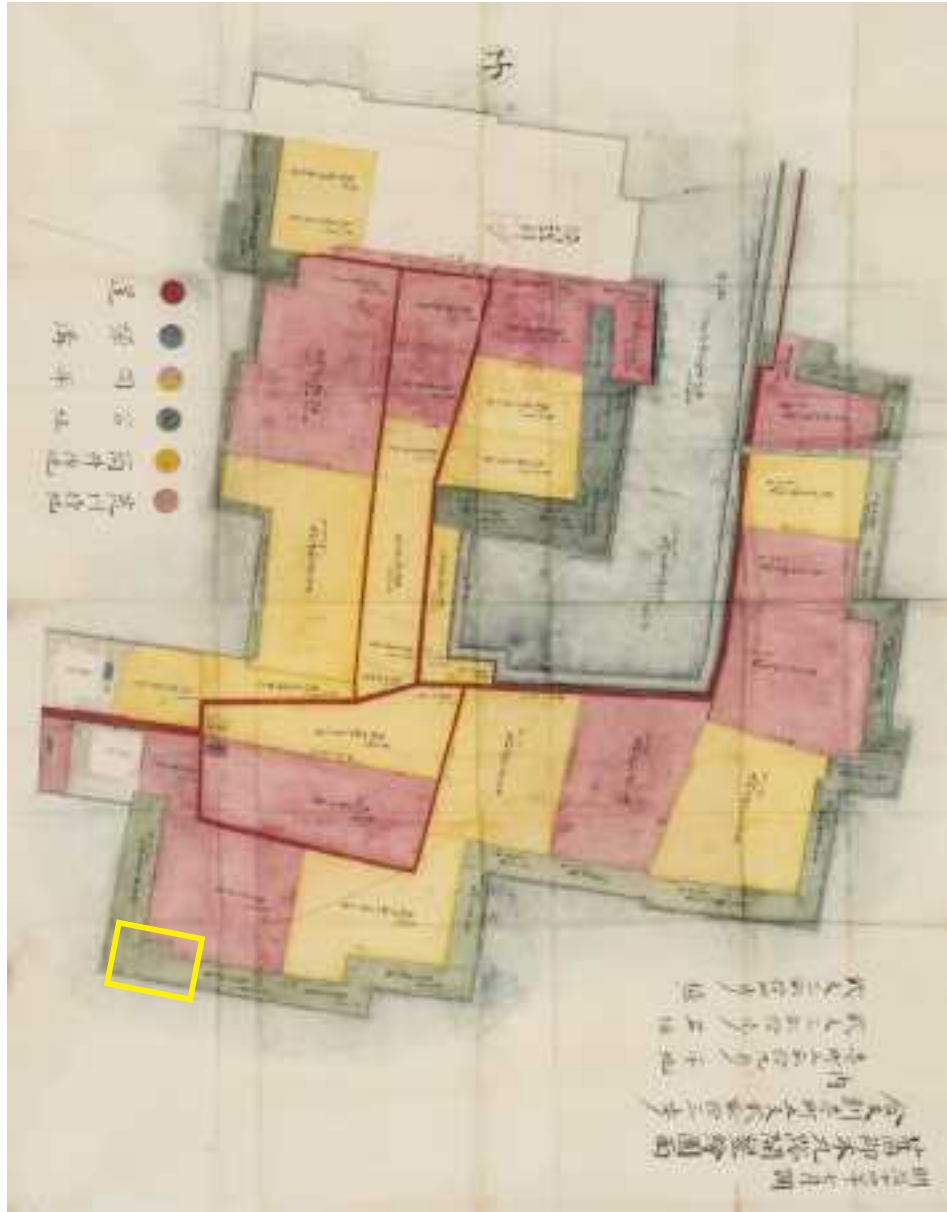


図 16. 旧御本丸跡開墾絵図面（明治 14 年） 舞鶴市蔵（口調査地点、上が北）

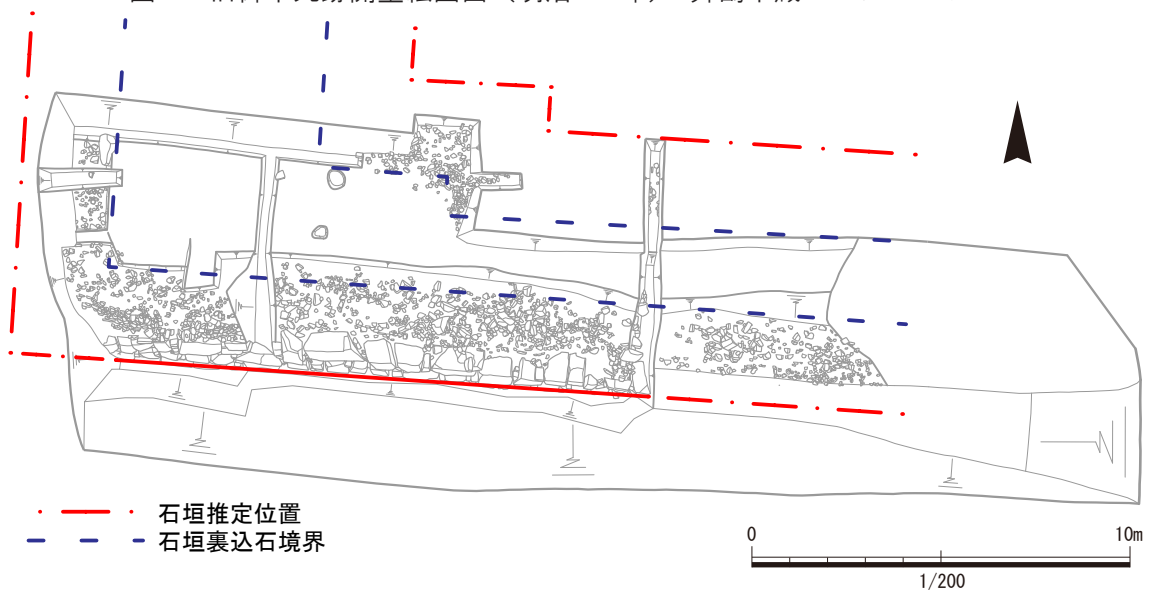


図 17. 本調査区の推定石垣位置

图 18. 田辺城西側石垣
修覆伺図控【部分】
(元禄 5 年)
舞鶴市蔵



(↑調査地点、上が北)

图 19. 田辺城図
(牧野家文書)【部分】
(延宝・元禄年間)
舞鶴市蔵



(↑調査地点、上が北)



(↑調査地点推定位置、上が北)

图 20. 田辺籠城図 (江戸時代) 大泉寺蔵
(左：部分 上：拡大図)

まとめ

今回の調査では、本丸南郭の南端を初めて確認すると共に、堀に面した石垣と外郭部の様相を明らかにすることができた。石垣の一部は築城当初まで遡る可能性があり、外郭部の緻密な盛土整地の様子や、絵図との比較から、本丸南郭南西角の隅櫓の位置にあたと判断した。

他の地点と比べても深い堀で、大型石材を使用した石垣を築造するなど、田辺城内でも丁寧な普請が行われた様子が伺える。実態が不明な部分が多い、築造当初の細川期の田辺城を考える上でも貴重な成果となった。今後の調査研究の進展に期待したい。

注

(3) 北垣聰一郎氏、森島康雄氏のご教示による。

【参考文献】

北垣聰一郎 1987『石垣普請』（ものと人間の文化史 58）法政大学出版局

舞鶴市史編さん委員会 1993『舞鶴市史・通史編（上）』舞鶴市

舞鶴市史編さん委員会 1994『舞鶴市史・年表編』舞鶴市

舞鶴市 2017『舞鶴の絵地図』

※表 2 に示した舞鶴市文化財調査報告の各報告書は省略した。

表 3. 遺物観察表

報告 番号	実測 番号	出土遺構 層位	器種		色調		法量 単位:cm ()は残存部、径は復元			備考
							長さ	幅	厚さ	
1	8	堀5-8層	瓦	軒平瓦	灰	N5/0	(22.5)	(20.5)	瓦当高4.0	
2	9	堀7-9層	瓦	軒平瓦	灰	N4/0	(23.9)	(18.0)	瓦当高4.0	
3	7	堀7-9層	瓦	軒平瓦	灰	N4/0	(10.5)	(15.5)	瓦当高4.9	
4	2	堀7-9層	瓦	軒丸瓦	灰	N6/0		径15.0	瓦当部2.6	
5	4	堀7-9層	瓦	軒丸瓦	灰	N4/0	(12.6)	径(15.2)	瓦当部2.3	
6	5	堀7層	瓦	軒丸瓦	灰	N5/0	(12.9)	径(14.4)	瓦当部2.2	
7	19	堀7-9層	瓦	熨斗瓦	暗灰	N2/0	(22.6)	10.0	2.0	
8	16	堀7-9層	瓦	平瓦	灰	N5/0	29.2	21.3	2.1	
9	17	堀7-9層	瓦	平瓦	灰	N6/0	29.2	22.7	1.9	
10	18	堀7-9層	瓦	平瓦	灰	N5/0	28.9	23.4	2.6	
11	13	堀7-9層	瓦	丸瓦	灰	N4/0	26.8	13.6	2.2	コビキA、工具痕
12	15	堀7-9層	瓦	丸瓦	灰	N4/0	28.6	14.5	2.4	コビキB
13	12	堀7-9層	瓦	丸瓦	灰	N5/0	(22.5)	13.9	2.3	コビキA、縄痕、布目
14	26	堀8-9層	陶器	播鉢	赤褐	10R5/3	高(5.1)	(3.2)	0.5	7条以上を単位とする播目
15	27	堀5層	陶器	播鉢	赤褐	10R5/3	高(5.5)	(6.4)	0.9	1本引きの播目
16	20	堀7-9層	土器	土師皿	にぶい黄橙	10YR7/4	高2.0	径(12.6)	0.5	煤付着 燈明皿
17	23	堀5-9層	木製品	独楽	オリーブ黒	5Y3/1	高(4.9)	(4.1)	(2.5)	上面に軸差込孔
18	24	堀7-9層	木製品	曲物	黒褐	7.5YR2/2	縦(11.8)	径(10.6)	0.6	底板か 木釘痕あり
19	25	堀7-9層	木製品	-	黒褐	2.5Y3/2	縦12.3	横(6.3)	1.2	用途不明
20	21	堀石垣 裏込石内 重機掘削中	石製品	一石五輪塔	灰	7.5Y6/1	高(11.5)	12.0		四方に梵字
21	22	堀石垣 裏込石内 攪乱層中	石製品	石仏	オリーブ灰	2.5GY6/1	高(23.1)	(21.1)	9.5	阿弥陀仏か

報告書抄録

ふりがな	たなべじょうあとだい31じはつつちょうさほうこくしょ							
書名	田辺城跡第31次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	舞鶴市文化財調査報告							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	松崎 健太							
編集機関	舞鶴市							
所在地	〒625-8555 京都府舞鶴市字北吸1044番地							
発行年月日	2019年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たなべじょうあと 田辺城跡	まいづるしあざみなみたなべ 舞鶴市字南田辺 こあざもとほんまる 小字元本丸 12番2ほか	26202	164	35° 26' 41.75"	135° 19' 48.53"	2018.8.1 ～ 9.28	約 400 m ²	集合住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
田辺城跡	城郭	近世	石垣、堀、 外郭盛土		瓦、陶器、石製品、 木製品		本丸南郭南端の堀 石垣と堀を確認。石 垣の一部は築城当 初まで遡る可能性が ある。	

圖 版

図版 1



調査地遠景（南東から）



調査地全景（上が北）



盛土層検出作業風景
(北西から)



南北方向裏込石検出状況
(東から)



裏込石 1 検出状況
(南西から)



裏込石・盛土層検出状況
(南から)



石垣 1 裏込石検出作業風景
(西から)



石垣 1 裏込石検出状況
(南東から)

石仏出土状況
(南東から)



断割 1 (南側)
(東から)



断割 1 (北側)
(東から)



図版 5



断割 2 (南側)
(東から)



断割 2 (北側)
(東から)



調査区北壁
(南から)

石垣 1 検出作業風景
(西から)



堀内瓦出土状況
(西から)



胴木検出状況
(南から)





石垣 1 完掘状況（東から）



調査区西壁・堀内堆積状況（東から）



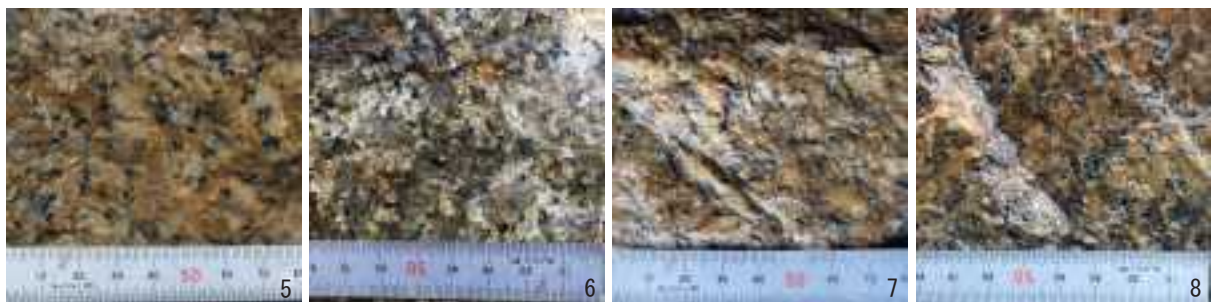
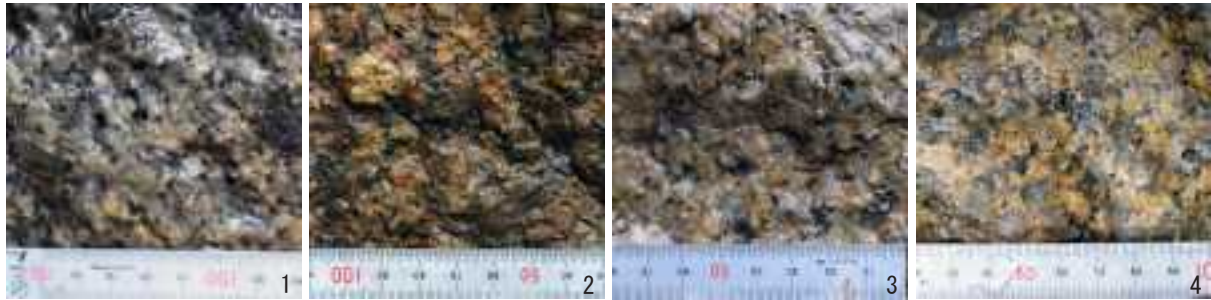
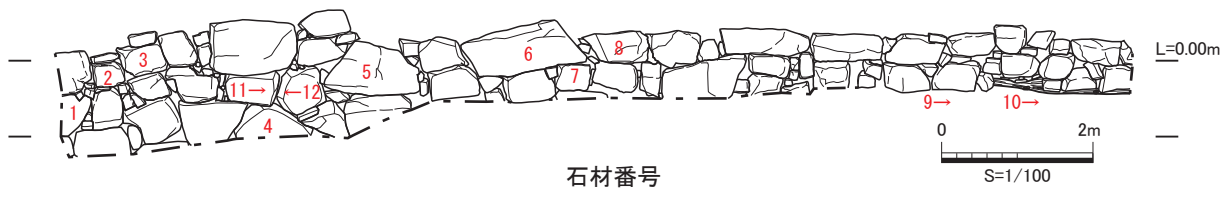
石垣 1 西側完掘状況（南から）



完掘状況（東から）



石垣 1 完掘状況 (西から)



石垣 1 石材写真

图版 1 1



出土遺物写真（瓦類）



20



21

出土遺物写真（陶器・土器・木製品・石製品）

舞鶴市文化財調査報告書第 51 集
田辺城跡第 31 次発掘調査報告書

刊行日 平成 3 1 年 3 月 27 日
発 行 舞鶴市
〒 6 2 5 - 8 5 5 5
京都府舞鶴市字北吸 1044 番地
印 刷 阿部印刷工業株式会社
〒 625-0036
京都府舞鶴市字浜 644 番地